

平成24年12月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

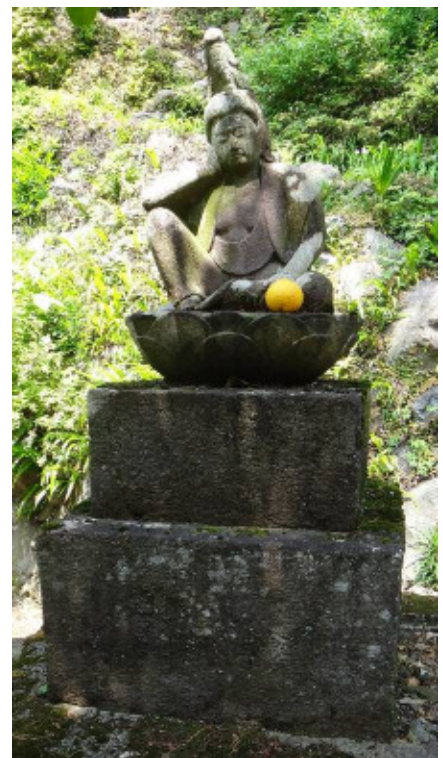
## 海禅寺の如意輪観音塔と血盆経

二俣尾四丁目にある海禅寺の本堂に向かって左側、墓地入口に、如意輪観音坐像を乗せた石塔があります。上段の台座には、摩耗してはいますが刻字が認められます。拓本にとって判読を試みると、「奉納血盆経」と見えるので、この石塔は血盆経けつぽんきょう供養塔であることが分かります。以下は台座にある刻字です。

奉納血盆経  
現當□世  
観音菩薩  
像奉造立之也  
武列多摩郡長湊  
郷二俣尾村澤井  
村善女人  
敬白

茲時 延宝  
二 甲寅 年

蘭穂吉日  
教主□恵真



海禅寺の如意輪観音塔

以上の刻字から、延宝二年らんしゅう蘭穂吉日に、二俣尾村と澤井村ぜんによにんの善女人が、「血盆経」と「観音菩薩像」を奉納したことが、読み取れます。延宝二年は西暦 1674 年、蘭穂は 7 月の異称です。

「血盆経」とは、10 世紀頃に中国で成立した 420 字余りの短い仏教經典で、日本には、室町時代中期頃には伝来していたとされます。その經典では、女性が生理や出産に伴う出血のために、死後、女性だけの地獄・血盆池（血の池）地獄に堕ちると説かれ、さらに、この血盆池地獄から救われる方法が示されています。その救済方法は、遺族が法要

を営み僧侶が血盆経を転読する、また、女人が血盆経を信心して書写し所持することで、血盆池に蓮華が出現して救済されるというものです。

伝来後、血盆経信仰は、遊行宗教者により民間に広く流布<sup>るふ</sup>していきました。なかでも熊野比丘尼<sup>くまのびくに</sup>は、「絵解き比丘尼」とも称され、血盆経に基づいて血の池地獄が描かれた「熊野観心十界曼荼羅」の絵解きをしながら、諸国を遊行し、御札を配り、木版刷りの血盆経を頒布しました。血盆経信仰は民間に定着していき、しだいに血の池地獄からの救済者として、如意輪観音菩薩が地獄絵に描かれるようにもなっていました。それは、法要を行うと、如意輪観音菩薩が現れて血盆経を血盆池に投げ入れることにより、女性が救済されるという信仰でした。こうした血盆経信仰は、江戸時代を通じてますます盛んになっていきました。法要や血盆経書写が、母親や近親女性の追善供養のために、息子などにより行われ、寺院では、血盆経を池や川に投げ入れて、追善供養する儀礼も行われました。木版印刷された血盆経は、女性の往生祈願のために棺に入れられたり、安産祈願の護符・お守りとしても用いられ、多くの寺院で発行されるようになりました。

日本では、血盆経伝来以前から、仏教や陰陽道に根ざした、女性の血へのケガレ意識・女性不浄観があり、血盆経信仰はそれらをさらに決定的にしたと考えられています。

如意輪観音菩薩については、立て膝の上に臂<sup>ひじ</sup>を置き、左脚を屈して座す姿勢から、座産での安産を願う民間信仰があり、近世以降の月待供養塔の主尊とされたり、江戸時代の女性の墓碑に一面二手像が刻まれたりと、多様な信仰が展開されています。

このような血盆経信仰の調査研究は、あまり多くはありませんが、その痕跡は、青森県から大分県にまでみられるといいます。海禅寺の如意輪観音血盆経供養塔は、二俣尾村・澤井村の善女達による講中が、江戸時代の1674年に、成仏・安産祈願のために造像したと刻字されているので、血盆経信仰がこの時代には青梅地方にまで及んでいたことを示す、貴重な1例です。

このレポートを書くにあたり、「伊奈石の会」の内山孝雄氏に、拓本を始め多くの御教示を頂きました。記して謝意を表します。 (文責 三好 ゆき江)

#### 参考文献

川村邦光 牧野和夫 高遠奈緒美(1996)『女と男の時空[日本女性史再考]Ⅲ 女と男の乱(中世)』 藤原書店

「女と男の時空」編纂委員会(1998)『年表・女と男の日本史』日本女性史再考 別巻 藤原書店

松岡 秀明「我が国における血盆経信仰についての一考察」(1998)『女性と宗教』日本女性史論集5 総合女性史研究会編 吉川弘文館